
緋弾のARIA～ロスト・ネーム～

かめアイス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緋弾のアリア〜ロスト・ネーム〜

【Nコード】

N8844V

【作者名】

かめアリス

【あらすじ】

突然、死んだと神様（自称）に告げられる秋元優、遊びだと思つて付き合っていたらなんとそいつは本当の神様！

神様からもらった3つの願いをかなえてもらえる権利を片手にテンプレートなチート人生を緋弾のアリアの世界で歩んでいこうとしたのになんだか知らないけど壮大なことに巻き込まれた秋元優のお話。
※基本は原作に沿って進めますが途中でオリジナル章をいれるかもしれないです。

※6話から基本、キンジ視点になるため読む際は注意してください

プロローグ（前書き）

はじめまして、かめアイスです。

さっきアリアを読んでたら書きたくなってきたので書き始めました。
本当に勢いだけの作品ですがよろしくです。

プロローグ

プロローグ

こんにちは皆さん、突然ですがここで問題です。
ここはどこでしょう？
ヒントは3つ。

1. とても、とても広いところです。
2. あたり一面真っ白なところです。
3. 目の前に髭をはやした神様みたいな人が立っています。

Q ここは何処でしょう？

A 「天国じゃ」

なっ、人が読者様様と楽しく場所当てゲームやってるというのにいきなり割り込んできよって。

「お前、何m「神じゃ」

むっ、人の話をさえぎるのが好きなようだな……
って、神様？

あの、雲の上とかに立って髭生やして杖持って後光が差してるイメージの？

まあ、目の前の人の姿そのまんまなんですけど。

「そうじゃ、神じゃ。」

どっ、読心術だと・・・

使える奴が現実に居たとは・・・

「勿論じゃ、ワシは神じゃからの。」

神様なのか、納得・・・できるかつ!!!!

一緒に考えてみよう読者様様。

気がついたら白い世界に居て、目の前のオジサンが急に自分は神様とか言い出したら先ずはその人の精神を疑うよな？

その例に従って俺は

「あの、いい病院があるんですが、電話番号教えますんで一度診て貰っては？」

「ワシは神じゃ、精神異常者などではないぞ。」

重症か・・・仕方ない。

精神病を患ってる人には同調してあげるといいとか昔、じっちゃん言ってた気がする。

仕方ない、話をあわせてあげるとしようか。

「で、その神様が俺に何の用ですか」

「突然じゃがお主は死んだのじゃ、お気の毒に。」

なんちゅう事を言い出すんだこの神様（自称）は！

俺が、死んだ？！

人を独自の妄想に組み込ませないでくれ、失礼であろう！
いや、待て、冷静になろう。

素数を数えるんだ、1357……

よし、冷静になれた、筈。

「俺は死んだと？ どうやって？ 神様（自称）」

「交通事故」

交通事故だと……

どうせ、妄想ならもっとかっこいい死に方にしてくれよ。
テロリストから人を守って死ぬとかそんな感じでさ……
他人の妄想に口出しはできないけどさ……

「そうなんですか、残念です。」

「あまり、驚かないのじゃな」

当然だ、全部この人の妄想だからな。

「ワシは何度も言っておるが神じゃぞ？」

また、読心術か。俺に教えてくれよ、使ってみたいんだよ。

「はいはい、で死んだはずの俺がなんでここにいるんですか？」

「転生抽選会じゃ」

「転生抽選会？」

「そうじゃ、転生抽選会じゃ。」

なんじゃそりゃ、聞いたこと無いな。

商店街の福引と一緒にようなものなのか？

「その転生抽選会とやらはどう言ったものなんだ？」

「100年間の死者の中から抽選で3人だけを、他の世界へと転生させる物なんじゃ。」

「それに俺は選ばれたと？そういう事なのか？」

「そういう事じゃ、よくわかったの」

いや、普通わかるだろ・・・普通だよな？心配になってきた、この人と喋っているとこっちまで精神がやられそうだ・・・

「で、その抽選会に当たったら何があるんですか？」

「文字通り転生できるのじゃ、但し生前の世界とは別の世界に、じやがの」

「生前の世界とは別の世界にか？んじゃあ、俺の居た平和な日本には戻れないのかい？」

「日本に戻ることは可能じゃぞ、しかし別の世界じやがの。」

「別の世界って、法律とかが違うのか。」

「簡単に言えばそうじゃな、お主は鋭いのう。」

当然だ、これでも一応成績は学年トップなんだ。

「で、転生する世界を選ぶ権利はこっち側にあるのかい？」

「うむ、勿論じゃ。」

ほう、うまくできてるじゃないか、神様（自称）

お前、こんな所で遊んでないで本でも書いてらどうだ？ 売れるんじゃないか？

「で、おぬしはどの世界に転生したいんじゃない？」

ふむ、真面目に考えるのもなんだしな、俺の好きな緋弾のアリアの世界でいいか。

一度、行ってみたいと思ったことがあるし。

「緋弾のアリアつつう本の世界がいいな、いけるなら。」

「了解じゃ、本当にそれでいいんじゃない？」

どうせ、いけないんだから別に気にしない。

「では、転生じゃ！」

瞬間、俺の意識は吹っ飛んだ。

プロローグ（後書き）

感想、誤字、アドバイスなどはどんどん送ってきてください。

チートな強さ（前書き）

とりあえず頭に浮かぶ限り書き続けるんでよろしくおねがいします。

チートな強さ

気がつくと、俺はどこかの部屋に居た。

「どこだ、ここは？」

『東京武偵高校の男子寮じゃよ。』

突然、聞き覚えのあるしわがれた声が頭に鳴り響く。
この声はあの神様（自称）じゃないか。

「は？ 武偵高の寮？」

いまいち頭が働かない。

『そうじゃ、お主が望んだ緋弾のアリアの世界じゃよ。』

俺が望んだ世界……あぁっ！！！！

神様（自称？）との会話が鮮明に蘇ってくる。

なっ、マジモンの神様だったのか……

ありえねえ……、嘘だろ。

『だから、最初から言っておったろう、神じゃと』

なんだか、すごい失礼なことを俺思っていたよな……

「取り敢えず、すみませんでしたっ！」

『何故、謝るのじゃ……まあいい、ワシはお主が気に入った、願い事を3つかなえてやろう』

「3?」

願い事だと！

ランプの魔人呼び出したわけでもないのに叶えてくれるのか！
すばらしい！ありがとう！神様（自称）じゃない神様（本当）！

『切り替えが早いのだ』

当たり前だ、だって神様が俺のこと気に入って願い事3つも叶えてくれるんだぜ！最高！

さてさて、何を叶えてもらおうかな？ かな？

億万長者？ 素敵な彼女？ 夢の身体能力？ チート能力？ e t c ∷ e t c ∷

ありすぎて、どれを頼めばいいのかわかんなくなってきたぜ！

H
A
☆
H
A
☆
H
A
☆
H
A
☆
H
A
☆
H
A
w
w
w
w

『テンションが高すぎるぞお主。』

ハッ、しまった俺としたことが、取り乱してしまった。

冷静になろう、素数を数えるんだ1357…

よし冷静になれた、筈

「なんでも、3つ願い事を叶えてくれるんだよね？」

「そうじゃ、
” なんでも
” じゃ」

なんでもか、なんでもなんだな……

おかしい、願い事なんていくらでも頭にあったはずなのにいざ叶えてもらうとなるとこれと言った答えが出てこない。

『迷っているようじゃから、1つアドバイスをやろう。』

アドバイス？どんなのを頼めばいいかってことか？
迷ってるのもなんだし、聞いてみよう。

「アドバイスってどんな？」

『ここは、緋弾のアリアの世界という事じゃ』

アドバイスなのか・・・？

待てよ、ここはアリアの世界、つまり武偵が存在するっていうことだよな？

つまり、”死ぬ危険”があるという事だ。

転生させてもらったのに死んでしまっただけは勿体無い。

その後、いろいろと考えて出した結果。

「神様、願い事、決まった」

『うむ、なんじゃ申してみよ。』

「1つ目、俺にチートな強さをくれ、最高の射撃能力とか、最高の身体能力とか、最高の頭の回転の速さとか。」

せっかく転生した身だ、寿命まで生き続けてやる。
そのためには自分を守る能力を持っていないとな。

『了解じゃ、残りの二つは何にするんじゃ?』

「残りの二つはまた、必要なときでいいか?」

『うむ、よからう。必要なときに”神”と呼んでくれればいつでも
でてくるからの。』

「わかった、ありがとう」

なんて、いい人なんだ・・・人じゃない、神様だ・・・
思わず泣きそうになる。

『では、1つ目のチートな強さを授けよう、目を瞑って3秒数えな
さい』

神様の指示通りに俺は目を瞑り3秒数えた。

なんだか、体が軽くなった気がする。

いまならなんでもできそうだ。

いや、今からならのほうが正しいかな?

ちよっと、どれくらいすごくなったのか試してみよう。

俺は立ち上がると、窓際まで歩いてゆきカーテンを開け放った。

目の前に広がる東京の町、完成直前の東京スカイツリー、東京タワー、
などが目に飛び込んでくる。

前居た東京と変わらないんだな、武偵高があるのを除いて。
集中してみると街中を歩く人たちの顔が鮮明に見える。

なんちゅう、視力じゃ・・・我ながら恐ろしい、チートだなこれは。
・・・まあ、俺が求めただけだ。

「神様、ありがとう。この命大切にするよ」

『うむ、ではまた必要なときに呼んでくれ』

「わかった、じゃあな」

神様に別れを告げると、妙に寂しくなってきた。

いつまでも、寂しくしてちゃダメだな。

外へ出かけよう、早くこの世界にも慣れたいしな。

携帯を開き日付を確認する、日付は普通の高校ならば始業式の前日であろう日付だった。

こんな細かいところまでできてんのな、すげえな。

始業式の前日という事は、当然学校はない。

これはちょうどいい、武偵高に通うなら武装とかもしなきゃいけないんだから買い物に出かけるか。

机の上に転がっている妙に”膨らんだ”財布を手に取り俺は外へと出た。

余談だが、なんか知ってるわけじゃないのに部屋の構図とかがどんな頭に浮かんでくるんだよな

これも神様のおかげかな、ありがとう神様。

チートな強さ（後書き）

感想、誤字指摘、アドバイスなどはどんどん送ってください。

嬢ちゃん！安くするよ！（前書き）

今回、初めて主人公の名前が出てきます。
あいかわらずの駄文ですがよろしくお願いします。

嬢ちゃん！安くするよ！

俺は装備を整えるために街中の銃砲店に向かっていた。
街中に銃砲店があるのかって？

武偵の資格ができてからというものの、街中に銃砲店が新しくできまくったらしい。

あ、これも頭の中に入ってた情報名な、神様本当にありがとう。
なんでも知識があって便利だよ、これぞまさしくチート。

さて、ここか。

俺は店のドアの前に立つ

銃砲店「平賀源内」

渋い、なぜ江戸時代の開発者の名前なんだ・・・？

店主が時代劇ファンか何かなのか・・・？

まあいい、店の名前にケチつけても仕方ないしな。

電車の中で確認した銃砲店評価サイトのレビューを見る限りではない店だそうだ。

なんでも、金さえ積みめばどんな改造でもしてくれるらしい

違法じゃないのか・・・？

まあ、別に本の中ではキンジも違法改造してるしねwww
問題ないよね！よね？

思い切って俺は店のドアをあけた。

目の前に広がっていたのは銃、銃、銃・・・

ただひたすらに銃だった。

一般の店というのは普通、カウンターがあって商品棚があってだな・
・・・まあ、わかるだろう。

しかしだ、この店ときたら棚なんてなんのその、そこらじゅうに銃
が”転がっている”

値札もなんにもない。

本当に店なのだろうか・・・？

心配になってきた俺は引き返そうと入り口に振り返った瞬間、後ろ
から声をかけられた。

「嬢ちゃん！安くするよっ！」

誤解を招く前に言っておく、俺は”男”だ。

いくら身長が150cmだからって、声が高いからって、髪が長い
からって、顔が女顔だからって

女と間違えるなっ！

と、言ってやりたかったが流石に言えず。

「俺は、男ですよ。」

とだけ優しく返しておく。

「ははっ、おもしろい嬢ちゃんだ！」

こいつ・・・

冗談だと思っているのか・・・

まあ、元居た世界でもよく間違われてたから気にしないけどね！（
開き直り）

今はとりあえず銃を買わないと。

え？財布の中身？

ノープロブレム、だってチートだもん、なんでもありだもん。
万札ギツシリだよ！嬉しい限りだね！

「嬢ちゃんは武偵なのかい？」

「はい一応武偵やってます、それと、俺は男です。」

武偵やってるって言ってもまだ一日目だな・・・
知識はあるけどね！

ポケットから武偵証を取り出して見せる。

「秋元^{あきもと ゆう} 優ちゃんか！可愛い名前だ！」

「ありがとうございます、それと、俺は男です」

このオジサンしつこいな・・・

あれ、俺の名前、読者様様に始めて公開だったのか。

おい作者、主人公の名前は普通プロローグで明かすもんだろ、しつかりしてくれよ。

ついでに年齢は16だ、今思えばキンジ達と同じ学年じゃないか、本物が見られるなんて嬉しいな。

「嬢ちゃんは何を探しにきたんだい？」

もういちいち訂正する気もなくなった。

「拳銃です。武偵になってまだ少しなんで扱いやすいのを探しにきました。」

初めての実銃だからな、扱いやすいの選はないと。

「ほほう、ちょっと待ってな！」

そういうとオジサンは店の奥へと入っていった。

それにしても、銃だらけだな・・・

改めて店内を見回して思った。

勿論、弾倉は抜いてあるんだろうけど銃口がこちらに向いてるものには恐怖が感じられる。

これから毎日、こんなを見ながら生活するんだろうな。

しばらく待っているとオジサンが戻ってきた。

「これなんかどうだ？嬢ちゃん」

そう言ってオジサンが見せてくれたのは

グロック17

9mmパラベラム弾を使用するオーストラリア製の拳銃だ。

勿論、これも脳内情報な。

たしか、複列弾倉で装弾数が17とそれなりに多い銃だ。
ダブルカラム・マガジン

拘っていても仕方が無いので、オジサンに薦められるがままにグロック17を購入した。

実銃を手にとって思ったけど、やっぱり重たいんだな、昔遊んでたエアガンとは大違いだ。

「可愛い、嬢ちゃんにはおまけだ」

って、言われてもう一丁同じ銃をくれた。

嬢ちゃんじゃないけどおまけは嬉しかった。

通販かよ・・・って突っ込みはなしな！

しかし、武装が多いに越したことは無いはず！

こうして晴れて俺は二丁拳銃^{ダフラ}へとなったのである。

扱えんのか？まあ、チートだしな。

問題ない筈だ。

その後俺は、適当に町をぶらぶらして寮へと戻ったのである。

明かりを消した部屋の中で俺は考えた。

明日から、武偵か・・・

原作どおりならキンジがチャリジャックされるんだよな。

拌みに行くか？駄目だな、セグウェイさんに殺されたくないからな。
なにはともあれ、明日に備えて寝るとするか。

俺は布団を頭からかぶって眠りの中へと落ちていった。

嬢ちゃん！安くするよ！（後書き）

感想、誤字指摘、アドバイスはどんどん送ってください。

チートってすげえのな（前書き）

優くんの服装に驚きです。
では駄文をどうぞ。

チートってすげえのな

翌朝、俺は7時55分に目覚めた。
これが意味することはわかるよな？

”遅刻”だ。

「くそっ、転校初日から遅刻する奴があるかよ……」
俺はそう呟きながら、武偵高への通学路を歩く。

え？道はわかるのかって？
例によって脳内情報だ。

丁度、武偵高の門をくぐった時第二グラウンド方面から爆発音が聞こえた。

キンジのチャリが爆発した音だな、んで今頃アリアと密着……
原作を知っていてもやっぱり気になるもんは気になるので自然と俺の足は第二グラウンドに向かっていった。

俺が第二グラウンドについた瞬間、体育倉庫の方から銃声が聞こえた。

おうおう、セグウェイさん頑張ってるねえ……
草の茂みから確認すると1，2，3：20台？！

おいおい、原作と違うじゃないか……
20台もいるとなるとキンジだけでは対処しきれないだろう。
ちよっと、腕試しもかねて挑んでみようか。

「はろー、セグウェイさん！」

俺は茂みから立ち上がりながらセグウェイ集団に声をかけた。

すると、俺の声を感知したのかセグウェイに搭載されているUZIの銃口が一気にこちらに向く。

いやぁ・・・怖いねぇ・・・いや、マジで怖いんだよ？

いくらチートな力があるからって怖いんだよ？

「その君っ！逃げろっ！」

声ができる方向に視線を移すとキンジがベレッタをセグウェイに向けてながらこちらに叫んでいた。

おお、やっぱり本物は違うね・・・

俺が、感激しているとセグウェイの銃口の向きが半分キンジ、半分俺に変わっていた。

おっとう、忘れてた忘れてた、ごめんねセグウェイさん。

「今から相手してあげるよっ！」

俺が腰のホルスターから先日買ったグロック17を取り出した瞬間こちらに向けられていた銃口が火を噴いた。

しかし、銃弾はすべて”視える”照準は俺の右手の先にあるグロック17だろう。

あれ？、頭じゃないのか...？ここは頭だろ普通！

ちよつと残念だな・・・

そんなことを考えている暇があるほど俺には銃弾が遅く見えた。

チートすげー、もう一回言おう、チートすげー。

俺はそう考えながら右手のグロックをUZIの発射した銃弾に向けて”1発”発砲した。

ビリヤード銃弾撃ちってね、やってみたかったんだよな！

特に狙いもせずに放った弾は吸い込まれるように相手の弾にあたり弾いた。

弾かれた弾が更に他の弾を弾いてゆき最後にはUZIに向けて全ての弾が帰ってゆき、UZIを破壊した。

「おおー！成功した！」

我ながら恐ろしいことをしたもんだ。

100発はあるであろう銃弾を”1発”の銃弾で弾きその上破壊したのだ。

これは、ヒステリアモードのキンジ以上じゃないのか・・・？で、そのキンジさんとは：

俺がキンジの方へと視線を向けると、上体を大きく逸らすと同時にベレッタをフルオートで発砲しながら横に薙いでUZIを破壊していた。

間近で見るとすごいなあ：

まあ、やろうと思ったら俺もできちゃうんだろうけど：

（キンジ視点）

「あ、危ないっ！撃たれるわ！」

アリアが真っ赤になりながらこちらに叫んだ

「アリアが撃たれるよりずっといいさ」

ヒステリアモードになっちゃった俺は後で聞いたら衝動的に拳銃自殺したくなるようなセリフを吐きながら体育館倉庫の外へと身を晒した。

目に入ってくるのは、20台のセグウェイ（UZI付き）と女の子。

女の子っ?!

しかもUZIの銃口は全て女の子へと向けられていて完全にピンチだ。

「そこの君っ!逃げろっ!」

俺は、その子への警告とUZIの注意をこちらへむけるため叫んだ。しかし、こちら側に向いた銃口は10つ、半分はあの女の子に向けられている。

チッ、こいつらを即座に破壊して・・・

「今から相手してあげるよっ!」

アリアとは大違いの透き通った綺麗な声があたりに響いた。その言葉と同時にUZIからざっと100発以上の弾丸が発射された。

まずいっ!

俺はベレッタを女の子を狙っているUZIに向け、発射しようとした。

が、その必要は無かった。

女の子は一瞬、残念そうな顔をした後、拳銃を抜き”1発”発砲した。

その1発の弾は敵の弾を弾き、弾かれた弾がさらに弾を弾き弾かれた弾が全てUZIへと戻ってゆき破壊した。

なんて子だ!たった”1発”の銃弾で100発はある弾を全て弾き返し、その上10台のUZIを全て破壊って言うのか?!

俺が、驚いているところらに向いているUZIが発砲してきた。

しかしその弾は、全て、当たらない
当たるわけがない

” 視える ” からだ今の俺には弾がまるでスローモーションのように
見えてしまうのだ。

いい狙いだ、全て俺の頭狙いか。

その射撃を俺は状態をそらして全てかわすと同時に10発の銃弾を
放った。

見なくても弾の行き先はわかる、使った弾は10発。
行き先はすべて、UZIの銃口である。

ズガガガガンッ！！と派手な音を響かせながらセグウェイは銃座の
UZIを吹っ飛ばされた。

俺の、たった10発の弾によって。

まあ、あの子は1発なんだけどな・・・

俺は少し悲しくなりながら女の子へと視線を向ける。

（優視点）

ん、キンジがこっちを見ているな。

視線を感じ取った俺は、そちらへと目を向ける。

「君はすごいな、たった1発ですべて倒してしまうなんて。」

キンジは感心しながら声をかけてきた。

当然といえば当然なのだろう。

自分だって驚きだ。

「いやあ、たいしたことないよーハハハ W W」

と俺は笑いながら答える：筈だった。
キンジがこんなことを言わなければ。

「中学生”で、”女の子”なのにたった一人で戦ったなんて信じられないよ」

キンジは H S S 特有の”女性に対して”のキザな発言をしてきたのである。

しかも盛大に2つとも間違えている。

1つは仕方ないだろう、なぜなら俺は
武偵高”女子”制服を着ているのだから。

なんで、こんな格好をしているのかと説明していると長くなるんで
また今度で：

ていうか思い出したくないんだ、制服を買ったときのことを。

「あんた、2つ盛大な間違いをしているぞ」

俺がすこし怒り口調になりながら返した

「俺は、”男”で、高2だっ！」

と、後でアリアが叫ぶであろう言葉を叫んだ。
男とは言わないだろうけどさ W

勿論キンジは驚いた顔をした後に微笑みながら

「冗談がうまい子だね、それに君は勇敢だ」

と、どこぞのオジサンのように冗談と受け止めてしまっていた。

弁明するのも面倒なのでとりあえず他に注意を向けさせようとして

「体育倉庫で仲良くしてた人はいいいのか？」

と失言をしてしまった。

「見えていたのかい？」

キンジが当然のように聞いてくる。

そりゃそうだよな、普通見えないんだからな、外から体育倉庫の中身なんて。

「撃たれるわよっ！って叫んでる子の声が聞こえたからね」

俺は必死になって言い訳をする

事実、聞こえたのである、あのアニメ声が。

聴力もすさまじいことになってるんだよね…どこまでチートなの俺。

「耳までいいんだね、驚きだ」

そういうながらキンジは体育倉庫へと歩いていった。

その隙に勿論俺は逃げ出し教室までの道をダッシュした。

途中、廊下に張り出されてあったクラス表を流し見すると

キンジや武藤、アリアたちと同じクラスであることがわかった。

主要登場人物のオンパレードだな！

まあ、知らない奴が大量にいるほかのクラスに飛ばされるより本の

中で知っている奴らと同じほうが幾分か楽だろう。
そう考えるとこのクラスはいいのかもしれない。

考えながら走っているといつのまにか教室の前にやってきていた。
足まで速いのは、驚き。

もう慣れたな、驚くのにも、チートすぎるから。

一応転校生つつう事だから折角やってきた教室をUターンして教務^{マスタ}
部^{リス}へと向かったのである。

初日から遅刻だなんて情けないな、まあキンジの実力を間近で見られたしいいか！

そう考えると不思議に気分が軽くなった。

マスターズで性別を間違えられたのは言うまでもないよな？

だって女子制服だもん：

もうこのままでもいいか！って俺は開き直ったりした。

チートってすげえのな（後書き）

優はこのまま転装生としてやらせようと思っています。
性別がばれている転装生としてですけどね。

感想や誤字指摘はどんどん送ってきてください。

”女子”制服（前書き）

優が女子制服を着てるのは書き始める前の企画で友人に、主人公女顔にして女子制服着させようぜっ！って言われたからです。

では、相変わらずの駄文をどうぞ。

”女子”制服

ここで、俺が女子制服を着ている理由を明かそうじゃないか、隠していても仕方が無いしな。

理由はこうだ。

俺が銃砲店で銃を買った後、街中をぶらぶらしているとだ

「そういや、制服も買つとかないな」

寮に制服が見当たらなかったことを思い出して、どこに売っているのかを携帯で調べたところ駅近くの学生服専門店とか言うところに売っているらしい。

普通の学生服専門店で防弾制服なんて売ってるのか…？

なにしろ防弾制服はその名のとおり”防弾性”であって普通の服ではない。

勿論、防弾性であるがゆえにコストも高いのだ、それが普通の学生服専門店で売ってるとは思えないのである。
実際売ってたんだけどな。

そんな事を考えている内に店に着いていた。

学生服専門店「ツルタニ」

今回の学生服屋のネーミングはどこぞの銃砲店と比べれば一般的な名前であった。

恐らく、店主の苗字か何かなのだろう。

俺は、そんな意味も無い推理をしてから店のドアに手をかけた瞬間、
「かっつわいいい！！」

と、後ろから豊かな双丘を押し付けられながら抱きつかれたのである。

胸があるって事は女性、男ならまだしも女性に反撃を加えて怪我を
させてしまつてマズイので俺は

「あの…その…む、胸が当たってます。」

と冷静(?)に対処した。

俺がドキマギしているのなんぞ知ったこっちゃないと言わんばかり
に女性はさらに体を密着させてくる。

「大丈夫！ 貴方も女の子だから！ 大丈夫！」

俺は、女じゃないんだが…って、問題点はそこじゃない、いや、そ
こも問題ではあるんだが。

それ以前に道で急に人に抱きつくなんぞ、前代未聞だアリエナイ。

「いや、俺は男ですしそれ以前に道端で急に抱きつくなんて全然大
丈夫じゃないです。」

俺は、そう言いながら女性の手首を器用に自分の首からはずしこの
状況から逃げ出した。

ほう、なんでもできるんだな、もうしつこいだろうけど言わせても
らうチートだな。

俺が感心していると女性が手首をさすりながらこちらに

「いきなり手首を掴むなんてひどいわね」

といかにも罪な視線を投げかけてきた。

いや、あんたの方がひどいと思うが…

いきなり道端で人に抱きつくなんて。

「手首を掴んだことは謝りますけど、道端で急に抱きつくのもどうかと思うんですね。」

俺は少々怒り気味に言った。

しかし女性は全然気にせず、微笑みながら俺にむかって

「しかし、男の子って言うのは本当なのかしら？ ちょっと…」

なんていいながらあろう事か俺の、その、股辺りに手を伸ばしてきた。

周りの視線が非常に痛い、抱きつかれた時点でだいぶ痛かったのにさらに痛い。

「ちよっ、この小説R—15指定じゃないんですから勘弁してくださいって！」

と、自分でも意味がわからない事を言いながら女性の手を掴み、思いつき投げ飛ばした。

通行人が驚いていたが今回ばかりは手加減無しで行かせてもらった、なんせ自分の貞操の危機だからな。

しかし、女性は投げ飛ばされたにもかかわらず

「案外やるわねえ？ 武偵高の生徒さん？」

なんて笑顔で聞いてきた。

世の中にはタフな人が居るもんだなと思いつつ

「はい、明日から武偵高に転入するんです」

と、答えた。

事実、明日から俺は武偵高に転入する、転入試験も受けていないのに合格通知がいろいろなものと一緒に寮にあったのを、朝確認している。

武偵ランクは試験を受けていないためかEであったが。

「そうなの、それで私の店に制服を買いに来たってわけね、どうぞ入って頂戴。」

そう言いながら女性は店の中へと入っていった。

「そうそう、それで買いにきたって……私の店」？

それって、え？あの人が店主さん？

こっちの世界の店主はみんなどこかおかしいのだろうか？

銃砲店のオジサンもしかり。

心配になってくる。

正直、あの人が店主の店はいろいろと危ない気がする。

しかし、制服を買わないといけないので仕方なく、”仕方なく”俺はその店へと入った。

「いらっしやい、とはいう必要は無いわね」

いや、必要あるとおもうぞ、客なんだから！

そう思いながら俺は女性に、武偵高の制服を買おうと頼もうとした

時、

「はい、これ武偵高の制服！あ、代金は半額でいいわよ、可愛いから大サービス！」

と、俺の心を読んだのか制服が入っているであろう紙袋を渡してきた。

今思い出すとここで中身を確認しなかったのが迂闊だった。

「で、どう？ここで試着していく？」

と怪しい笑みになりながら尋ねてきたので俺は身の危険を感じ

「え、遠慮しときます」

と言い、お金を払って全力で寮に戻った。

寮に戻った後に、袋の中身の確認すると案の定”女子”制服が入っていたと言う訳だ。

しかも添えてあった紙に

またご利用ください (≡▽≡) ノシ

なんて、可愛い絵文字とともに

鶴谷 恵美子 090—XXXX—XXXX

って名前と一緒に電話番号まで書かれていた。

あの短時間でここまで準備するとは恐ろしいものである。

俺は大きなため息をついたのであった。

余談だが、あの制服をいやいや着てみるといやというほど体にあつてゐるんだよな。

寸法測ったわけでもないのにどうしてわかったのかはわからないし、わかつてはいけない気がした。

”女子”制服（後書き）

たぶん連続更新がここで切れますんで、切れた後は一日一話投稿で
きるように頑張っていくので、楽しみにしてください。いる方がい
れば、”いれば”よろしくお願いします。

感想や誤字指摘はどんどんしてください。

波乱の自己紹介（前書き）

今回はキンジ視点でお送りいたします。

波乱の自己紹介

「一般^{パンチユー}中学から転校してきた秋元優です。武偵^{アサルト}ランクはE、志望^{アサルト}学
科は強襲科です。」

俺、遠山キンジは新学期早々度肝を抜かれていた。

そんなバカな……

あの子は今朝一人でUZI搭載のセグウェイを10台相手し、たった1発の弾で破壊した子なんだぞ？

それが、一般^{パンチユー}中出身の”E”ランクだと？
ありえん。

あの戦闘を見る限りランクはSでもおかしくはない。
というかSランクだろう、あれは。

あの戦闘の後、俺が怒ったエリアから逃走した時にはあの子はもう
いなかった。

俺の見た限りでは中学生だと思っていたのだが高校生で俺と同じ2
年A組だったとは。

「おいキンジ、あの子可愛くねえか？」

俺の隣から声をかけてきたのは武藤剛気

俺が強襲^{アサルト}科にいたころよく現場へ俺達を運んでくれた車輜^{ロジ}科
の優等生で乗り物と名のつくものならスクーターからロケットまで
なんでも運転できる特技がある。

「俺は興味ねえよ。」

俺はあの子の秘密を1つ知っている。

”男”であるという事だ。

まだ確信はないのだが。

今朝の戦闘のあと俺があの子に話しかけて怒らせってしまった際にあの子が口走ったのだ。

「俺は、”男”で、高2だっ！」

俺は最初、どちらとも冗談だと思って受け取っていた。

身長は150cmぐらいだし、なにより女子制服を着ていたからな。中学生であるということは現時点で嘘だとわかった。

そうなるともう1つの男であるということも本当である可能性が高い。

男であるのならばチェンジ転装生だろう。

俺は探偵科で培った推理を働かせて予想していた。

「ハ―イ、秋元さんありがとう、次は3学期に転校してきたカーワイイ子に自己紹介してもらおうわよー」

いやな予感がする。

その予感的中し、俺の死角であった席を立ち教壇にあがったそのピンクツイントールはまさにさっきの神崎・H・アリアであったわけ、ヒステリアモードが切れて通常モードに戻っていた俺は銃撃されるのを半分覚悟してガタガタ震えていた。

しかし、その神崎・H・アリアが放ったものは銃弾ではなく。

「先生、私はアイツの隣に座りたい」

爆弾発言だった。

教室が一瞬静まりかえり、それから一斉に俺を見て――
わぁーっ！っ！と教室が震えるぐらい大きな歓声を上げた。

ずり、つと俺はイスから転げ落ちた。

絶句、ただ絶句するしかなかった。

「な、なんでだよ……！」

俺はかろうじて出てきた言葉を呟く。

『正義の味方』として利用するわけじゃないだろう、あの子の戦闘力ならヒステリアモードとの俺とも恐らく互角に戦えるだろう。

気に入られた……？――

そんなわけは無いな、あいつは最後の最後まで俺に武器をつきつけてたんだから。

まさか、隣の席に座ってじっくり俺のことを殺そうってのか？

「よ……よかったなキンジ！なんかよく分からんがお前にも春が来たみたいだぞ！」

武藤が選挙で当選した議員の秘書みたいに両手を掴んで上下に振ってきた。

「先生！俺、神崎さんと席替わります！」

武藤が余計なことを言いやがった、後でボコってやる。

「あらあら、最近の女子高生は積極的ねえ。じゃあ武藤君、席を替わってあげて。」

先生はなんだか嬉しそうに俺と神崎を交互に見ながら言った。

武藤が親指をあげながら去っていく。

ああ、武藤、お前は何を勘違いしているのかは知らないが一回俺はこいつに殺されかけてるんだぞ？

勘弁してくれよ。

「先生！僕あの人の隣の席に座りたいです！」

秋元が席を勢いよく立ち上がりながら言った。

お前の席は窓際の一番後ろっていう素晴らしいポジションじゃないか！何故替わる必要があるんだ！

神崎だけでもいっぱいいっぱいなにお前まで俺の隣に来るのか？朝の一件で怒らせてしまった事は後で謝るからこんな生き地獄みたいなことはやめてくれよ。

また教室が揺れるぐらいの歓声が起こり

「はいはい！理子！ユーちゃんと席替わります！」

と、俺の隣に座っていた峰理子が嬉しそうに立ち上がった。

こいつは探偵科^{インクスタ}一番のバカキャラで自分の制服をヒラヒラのフリフリに魔改造している見たまんまのオタクだ。

「キーくん！よかったね！アリアだけじゃなくてユーちゃんまで隣に来てくれるなんて！両手に華だね！」

両手に華どころか両手にピンを抜いたあとの手榴弾を持ってるようなものだぞ…

因みに、キーくんというのは珍妙なこいつがつけた珍妙なあだ名だ。

聞いたところ、もう秋元にもユーちゃんとか言うあだ名つけてるみたいだな。

なれなれしい奴だが何故かみんなに嫌われないんだ。

「ありがとう、峰さん」

秋元がカバン一式を抱えながら隣の席にどっかりと座った。

「うんうん、頑張ってるね！それと、理子のことは理子って呼んでね！」

理子が笑顔になりながら秋元の席だった場所に駆け足で向かってゆく。

丁度そのとき神崎が俺の前あたりに来て。

「キンジ、これさっきのベルト」

と、いきなり俺を呼び捨てにしながら体育倉庫で渡したベルトを投げてきた。

よく見れば、上下ともに制服は新品になっていた。

「理子わかった！わかつちやった！…これフラグばっきばきにたってるよ！」

理子が机にバン！と手を突きながら立ち上がった。

お前、忙しい奴だな…

で、そのフラグとやらはなんなんだ？

「キーくんベルトしてない！で、そのベルトをアリアが持ってた！これ、謎でしょ？でもね、…理子にはわかっちゃった！」

何がわかったんだ…？

「キーくんはアリアの前でベルトを取るような何らかの行為をした！そして彼女の部屋にベルトを忘れてきた！つまり、二人は熱い熱い恋愛の真っ最中なんだよ！」

ツーサイドアップのゆるい天然パーマをゆさゆささせながらオバカ推理ぶちまけた。

それはないだろう、お前

しかしここはバカのふきだまり、武偵高そんな話題だけで一気に場は盛り上がる。

「お、お前らふざけ…」

と俺が抗議をしようと席を立ち上がったとき。

ズガン！という銃撃音後にパンツと乾いた音が響きキンツとその銃弾を”弾いた”であろう音が聞こえた。

その音で教室は静まり返る。

武偵高では”原則”無意味な発砲は禁止である、つまりは発砲してもいいのだ。

自己紹介の最中に撃ったのはこいつがはじめただろうがな。

恐らく拳銃をぶっ放したのは神崎だろうがその銃弾を弾いたのは…？

拳銃をぶっ放した神崎にも驚きだがその銃弾を弾いた奴にも驚きである。

ほぼ不意打ちにも等しい銃撃に反応し、その上”銃弾”で弾いたのだ。

その弾いた奴というのはやっぱりというべきか秋元だった。

朝のあれは偶然なんかじゃ無かったって事だな。

「神崎さん、危ないから急に教室で拳銃を撃つのはやめてくれないかな？人に当たったらどうするの？」

とソプラノ楽器を響かせたみたいな綺麗な透き通った声で迷惑そうな顔をしながら抗議した後、何事も無かったように席に着いた。

勿論だが、教室は静まり返っている。

銃撃したその弾を弾丸で弾く芸当を見せ付けられたのだ、静まり返るなどいわれる方が無理であろう。

その弾いた本人が一般中出身のEランク武偵^{バンチュー}なんだからな。

神崎本人も驚いた顔で

「……あんた」

と、呟いた。

その後に、我に返ったようで

「れっ、恋愛なんてくだらない！覚えておきなさいそんなバカな事抜かす奴には…」

この後のセリフが神崎が武偵高の生徒に対して放った最初の言葉…

「風穴、開けるわよ！」

波乱の自己紹介（後書き）

次は屋上の話です。

誤字指摘や感想はどんどんください。

屋上の時間（前書き）

当初、主人公の予定だった優は話の都合上、サブキャラになりました。

主人公はキンジへと役代わりです。

屋上の時間

昼休みになると同時に質問の憂き攻めにあった俺はなんとかクラス
のバカ共を撒いて理科棟の屋上に避難した。

だいたい、神崎のことを聞かれても何も知らないんだ。

今朝のチャリジャックで助けてもらってそのあと追っかけまわされ
たというだけの関係。

あいつらが考えていることなど一切無いのだ。

「やあ遠山キンジ」

ソプラノ楽器を鳴らしたみたいな綺麗な声が後ろから聞こえた。

声だけで誰だかわかったが無視すると銃撃されかねないので仕方無
しに振り向いた。

そこには、やっぱり秋元が立っていた。

「なんだよ、俺は一人でいたいんだほっといてくれ」

俺はため息混じりにそう言って会話を続けさせようと思わなかった。
すると階段の方から誰かが話す声が聞こえてきた。

声を聞く限りではうちのクラスアサルトの、それも強襲科の女子だ。

今、ネタの大本であろうこいつと一緒に居るのを見られてしまうと
また意味の分からない噂に拍車がかかっちゃう。

それは俺としては困るので。

「おい、秋元こっちこい」

と、俺は秋元の手を引っ張って犯罪者みたいにコソコソと水道タン

クの裏へと非難した。

さっきのクラスの女子共に見つかっていない事を確認すると俺は秋元に振り返り。

「何の用だ？」

と、少々言葉に怒気を表しながら聞いたら。

「ちょっとな、話があるんだ。」

と、教室で聞いた丁寧な口調とは裏腹に男口調で返してきた。

「そういや、こいう男だったな」

あくまで自称だが、可能性は捨てきれない。

「丁度いい、そのことに関しても聞かか。」

「丁度よかった、俺からも話があるんだ」

「そうか、じゃあお前からどうぞ」

そう言って秋元は頭を下げて右手の平を上に見せる所謂、どうぞど
うぞポーズになって薦めてきた。

「なんだかよく分からないやつだな。」

自分を男だといい、Eランク武偵でありながらヒステリアモードの
俺でもできるかできないかの銃弾撃ち何食わぬ顔でやってのけたり。

「そうか、じゃあ遠慮せずに、単刀直入に聞かか？ いいな？」

俺が確認を取ると秋元は「いいよ」と答えたので俺は疑問をぶつけ
る。

「お前は、転装生チェンジか？」

転装生チェンジというのは、教務部マスターズの許可を取り、女が男の振りをしたり、男が女の振りをしたりしながら武偵高に通うことだ。

まあ、簡単に言えば男装・女装しながら学校に通うって事だな。やる意図が俺には全く見えないんだがな。

滅多にいないんだが、噂によると学年に1人、2人はいるらしい。

「一応、そういうことになってる。話はそれだけか？」

と、少し落ち込んだ表情で答えた。

しまった、地雷だったか…？

転装生チェンジの中にはすごく重たい任務とか背負ってくる奴とかも居るという噂だからな。

恐らくその類だろう。

まあ、詳しい話はまた今度聞くとして。

今はこいつの話を聞こうじゃないか。

「で、話ってなんだ？」

俺がたずねると無表情に戻って。

「神崎・H・アリアのパートナーになれ、俺が言うことはそれだけだ。」

そう秋元は言うのと俺の返答も聞かずに身を翻して屋上のフェンスに上るとワイヤーで下まで降りていつ

しまった。

神崎のパートナーになれだど？

意味が分からない、あいつに一体何の意図があるんだ？
秋元優、お前は一体何者なんだ？

俺がそれを知ったのは放課後のことだった。

屋上の時間（後書き）

誤字指摘や感想はどんどんください。

ドレイになりなさい！（前書き）

今回は長くなりました。

では見苦しい文をどうぞ

ドレイになりなさい！

夕方――

クラスのカカ共から解放された俺は自室のソファ―にどっかりと腰を沈め、昼休みのことを思い出していた。

「神崎・H・アリアのパートナーになれ、俺が言うことはそれだけだ。」

あの秋元の言葉が頭から離れない。
一体なんだったんだ？

ピンポーン

今日は世にも珍しいチャリジャックにあったり。

ピンポーン

その後、神崎に追い掛け回されたり、秋元から…

ピポピポピポピポピンポーン！ピポピポピンポーン！

あーっ！うっせえな、放課後ぐらい一人でゆっくりさせてくれよ。
居留守を使うか迷ったが鳴り響くタイムの音にうんざりしてきた俺はしぶしぶと自室のドアを開けた、そこには。

「誰だよ…」

「遅い！あたしがチャイムを押したら5秒以内に出ること！」

両手を腰にあて、赤紫色カメリアの瞳をぎぎん！と吊り上げた―

「か、神崎っ?!」

神崎・H・アリアがいた。

俺は幻でも見たのだと思い、開いたドアをヒステリアモード並みの瞬発力で閉めようとした
しかし、ドアが閉まりきる直前に足をドアの隙間に入れられて閉めるのを邪魔され、あげくは力押しで家に取り込んできた。

「アリアでいいわよ」

なんて、アリアは言いながらケンケン交じりの変な歩き方で靴を脱ぐと

とてとと廊下に入りこんでしまった。

「お、おい！待て、勝手に入るな！」

俺はアリアを止めようと手を伸ばしたが身長差のせいでかがかわされる。

しゃらっ、と俺の指先が掠めたのはなめらかな感触のツインテールのさきっぱだけだった。

「トランク、中に運んでおきなさい。ねえトイレどこ？」

俺の言葉なんかには耳を貸さずに部屋をふんふん見回し、トイレを発見するととてとと子供みたいに小走りが入って行ってしまった。

…いかん

ここは”武偵高”

武偵の語源はもともと武装”探偵”だ。
尾けられたって事か…

「てか、トランクって…」

何がなんだかわからないまま玄関先へと視線を戻すとそこにはロゴでブランド物と分かる花柄のちっこいトランクがちょーん、と鎮座していた。

これもマズイ…

女物のトランクが部屋の前にあるなど、近隣の生徒に見られたら後でなんていわれるかわかったもんじゃない。

ここは”男子”寮なんだぞ

「あんた、ここ一人部屋なの？」

トイレから出てきたエリアは何が入っているのか異様に重たいトランクを玄関に引きずりこむ俺なんか目もくれず、部屋の様子を窺っていた。

そして部屋の奥、窓のあたりまで侵入すると

何がいいのか。

くるつと――

その体を夕日に沈め、エリアは俺に振り返った。

しゃらり。長いツインテールの髪がその動きを追うようにして緩やかな曲線を描く。

「キンジ。あんた、あたしのドレイになりなさい！」

…

………

………ありえんだろ、コイツ。

いきなり俺を助けたと思ったら拳銃撃って、刀を振り回し、俺の隣の席に座りたいといってきた、俺の部屋に侵入し、挙句。

”ドレイ”になれだど？

「ほら！さっさと飲み物ぐらい出しなさいよ！無礼な奴ね！」

ぽふ！

盛大にスカートをひらめかせながら、アリアはさっきまで俺が座っていたソファーにその小さなオシりを落とした。

いきなり家に押しかけてくるのは無礼といわないのか？、と俺は言い返したくなったが言い返すと恐らく例の二丁拳銃で銃撃されかねないので言葉をそつと胸の奥にしまった。

アリアのことだ、放課後でも帯銃しているんだろう。

「コーヒー！エスプレッソ・ルンゴ・ドッピオ！砂糖はカンナ！1分以内！」

すまん、なんだその魔法の呪文みたいなコーヒーは、エスプレッソあたりまでしかわからなかったぞ…？

簡単にはご退出願えそうにないことを直感で悟った俺は仕方なしにインスタントコーヒーを入れてやると、アリアは

「？」

と、そのちっこい手、両手に持ったカップに花を近づけてふんふんやった。

「これホントにコーヒーなの？」

どうやらインスタントコーヒーを知らないらしい。どこまで常識はずれなんだお前は。

「それしかないんだからありがたく飲めよ」

「ずず…ヘンな味。ギリシャコーヒーに似てるけど…んーでも違う」

「味なんかどうでもいいだろ。それよりだ」

自分もコーヒーをすすりながら不法侵入娘に指を向け、

「今朝助けてもらったことは感謝している」

ピンポーン！ピンポーン！

再び部屋にチャイムの音が鳴り響く。

俺はアリアに指を向けたまま固まってしまった。

誰だ？この不法進入娘だけじゃなくまた誰か俺の部屋に上がりこもうとしているのか…

そうじゃなかったとしても部屋に女子が居るという事でマズイ状況だ、ここはなんとしても居留守で…

がちや。

俺の考えとは裏腹に、玄関の扉が開けられる音がして

とんとん

と部屋の廊下を歩く音が聞こえる。

「お楽しみのところ、申し訳ないな」

声の主がいるであろう方向に顔を向けると：

長い髪をなびかせながら満面の笑みで、

秋元が立っていた。

「お、おい！アリア！こいつ呼んだのか？！」

と、俺はアリアに確認をとるために振り向くと

アリア本人も予想外の来客らしくカップに口をつけた状態で固まっていた。

アリアも知らないならこいつは一体なぜこんな所にきたんだ？

まさかアリアと同じで俺にドレイになればと言うんじゃないんだろうな：

俺は先ほど言われた言葉を思い出しながら

「あ、秋元！ここは俺の部屋だ！なのになんでお前が来る！」

と秋元に向かってほぼ怒鳴りにも等しい声を上げる。

アリアだけでもいっぱいいっぱいなのにこいつまで俺の部屋に来るなんて。

しかし秋元はそんな俺にお構い無しに先ほど、アリアがドレイ宣言をぶちまけた窓辺に向かい、くるりと振り返ると。

「遠山キンジ。神崎・H・アリアの”パートナー”になれ」

ぶふーっ！

と俺の横で固まっていたアリアが盛大にコーヒーを噴出した。

おいおい、床が汚れたじゃないか…ってそんな事を心配している場合ではない。

今は秋元の放った爆弾発言についてだ。

アリアのパートナーになれ？

昼休みと同じ事を言いに着たのか？

何なんだコイツは、アリアのお使いかなんか…？

違うな、アリア本人も非常に驚いている。

自分の使いならばここまで驚くことは無いだろう。

ならば何なんだコイツは…

「なっ?! なんなのよあんなっ!」

アリアが驚きと怒り、両方混じったような声を上げる。

しかしそんなアリアなんか気にせずに秋元は。

「俺は、ある人物からの依頼でお前達を保護しろと言われている。

これは命令だ、遠山キンジ。神崎・H・アリアの”パートナー”になれ」

ある人物の依頼? 誰なんだそいつは…?

俺達を保護する? しかしなぜ俺とアリアをパートナーの関係にする必要がある?

コイツにとって一緒にいたほうが都合がいいのか?

わからない、”今”の俺には。

ずきゅん！ずきゅん！

アリアが何を間違えたのか秋元に向かって二丁拳銃をぶっ放していた。

「なによ！アンタは！」

しかし秋元はアリアの放った銃弾を見ることがもなく何処からか取り出したバタフライ・ナイフで”斬った”。

「拳銃を撃つ前に僕の話聞いてくれるかな？神崎さん」

ちゃきつ、とバタフライ・ナイフを流れるような手つきしまいつつ秋元は穏やかな笑みで丁寧な口調になりながらアリアに近寄り。

「……なえ」

よく聞こえなかったのだが何かアリアに耳打ちをした。

それがアリアの弱みだったのかは知らないがアリアはおとなしく二丁拳銃を下ろし

「…わかったわ…話を聞こうじゃない」

と弱弱しく返事をした。

相当な弱みを握られているんだな、アリアよ。

「ありがとう、助かるよ。遠山君、君も話を聞いてくれるかな？」

秋元はさっきまで俺達が座っていたソファにどっかりと腰をおろすと
その漆黒の瞳ノワールをまっすぐその俺に向けて聞いてきた。

っ…

今は…こいつの話におとなしく従ったほうがよさそうだ。
下手に反抗して銃撃でもされたら困るしな。

「…わかった、話を聞こう」

俺はぐうの音をあげて秋元の話聞くことにした。

「ありがとう、二人共。さて、本題に入ろうか。」

秋元は両手をパンツ！とたたいて仕切りなおしの意を表した。

しかしコイツは一体何者なんだ？

いきなり家に押しかけてきてアリアのパートナーになれ？

全く意図が掴めない。

チェンジ
転装生だしな。

「さて、僕からの話はさっきも言ったとおり、遠山君には強襲科アサルトに
戻って神崎さんとチームを組んでほしいんだ。あ、僕もそのチーム
に入れてもらうからね。いいよね神崎さん？」

ちょっと待て、今コイツ、”戻って”って言ったよなコイツなんで
俺が強襲科アサルトにいたことを知ってるんだ？

こいつは今年からの転入生だ、去年の俺のことなんて知っているはずが
無い、ますます何者なんだコイツ。

「キ、キンジにはもともとそのつもりだったけどアンタは何なのよ

！アンタみたいな得体の知れない奴はお断りよ！」

おいおい、アリア、もともと俺を強襲科^{アサルト}につれて帰るつもりだったのか…？

秋元にも驚きだがお前にも驚きだぞ。

ていうかドレイつつうのはこき使えるチームの駒になれてことだったのか？

どうやらアリアが言っていたドレイになれというのは強襲科^{アサルト}に戻ってチームを組めとの事だったらしい。

そういうことならドレイになれとなんざ言わずに素直にチームを組んでくれて言えばいいのにどんだけ口が悪いんだこいつは。

まあ…素直になれといわれてもあの強襲科^{アサルト}には戻りたくは無いがな。

「うーん、困ったなあ…」

と秋元は半笑いになりながら困ったなあ、という表情をした。

うつ…

不覚にもその困った顔にドキッ、ときてしまった。

落ち着け、俺。こいつは男なんだ…！！

俺が自分の理性と戦っていると秋元が片手の手のひらを右手の拳をパンッ！とたたく所謂閃いたのしぐさをして。

「よし！神崎さん！こうしよう明日、強襲科^{アサルト}の授業のとき僕と戦って僕が勝ったらチームに入れてよ！これでいいかな？」

とアリアに事実上の宣戦布告をした。

アリアは一瞬戸惑った顔したが、すぐいつもの不機嫌そうな顔に戻

ると

「いいわよ！私と戦って勝てたらチームに入れてあげるわっ！Eランクが私に勝てると思っているの？」

びしっ！と秋元を指差しながらその挑戦を承諾した。

おいちよつと待て、あんたら。俺がそのチームに入るって事は決定事項なのか？

「ちよつと待て！お前ら俺を無視して話を進めるな！俺の話も聞け！」

流石に我慢しきれなくなった俺は大声で

「俺が承諾もしてねえのになんで勝手n…」

バン！パン！

ひゅんっ！、と俺の耳元あたりを風を切る音を響かせながら2発の銃弾が通り過ぎていった。

「「キンジ（遠山君）に拒否権はないわよ（よ）！」」

身の危険を感じた俺は

「わ、わかった強襲科アサルトに戻ってやる！ただしだ！」

降伏することにした、ただし無条件降伏じゃない。
条件降伏だ

「俺がアリアとチームを組んで最初に起きた事件を一件、解決してやる一件だけだぞ！」

最初の一件で通常モードの平凡な俺を見せ付ければアリアもあきらめて手を引いてくれるはずだ。

秋元にも何かしらのことをして俺とアリアにチームに組ませることを諦めさせよう。

俺は武偵をやめるんだ” 武偵だけはイヤなんだ”

ここでこいつらに深くかわってしまおうと俺のプランが根元からジエングの崩壊みたいにガラガラと崩れ去っちゃう、それだけはなんとしてでも阻止せねばならない。

「わかったわ、事件1件にね？そのかわり、どんな大きな事件でも1件よ？」

「どんな小さな事件でもだぞ。秋元もそれでいいか？」

俺が秋元に尋ねると秋元は微笑みながら

「うん、それでいいよ。…作…ら、…だしな」

最後の方は聞き取れなかったがどうやら秋元もこの条件でいいらしい。

「手抜きなんかしたら風穴開けるわよ？」

「全力でやってやるよ」

ただし、通常モードの全力でだ。

その後秋元は、

「じゃあまた明日、神崎さん、遠山君」

とおなががすいたと言って自分の部屋へと戻っていつてしまった。
やっと開放されたとソファにどかっと腰を落としたがうちの不法侵入娘が

「おなか減った、なんか食べるもんじゃないの？」

なんて言ったもんだからしぶしぶとアリアとコンビニに向かったのである。

すこしは落ち着かせてくれよ、俺はもうクタクタだ。

コンビニでアリアは松本屋の『ももまん』を文字通り買い占めた。

そんなにすきなのかもまん、俺はアリアの可愛い一面を発見した
と思った。

明日は秋元とアリアの決闘だな、気になるし見に行くか。

俺は明日のことを考えつつ重い足をひきずって寮へと帰宅した。

ドレイになりなさい！（後書き）

次はアサルトでの優とアリアの戦闘シーンです。
先に断っておきますが作者は戦闘描写が苦手です。

誤字指摘、感想はどんどんください。

決闘（前書き）

下手な戦闘シーンにお付き合いください

決闘

「起きなさい！バカキンジ！」

がすつと、腹にいきなり入れたられたハンマーパンチに続きぐしゃっ、とたまらず目を覚ました俺の顔面にさらに足が飛んできた。

そのままぐりぐりいーつと、アリアは黒いオーバーニーソックスの足で俺の顔を踏みにじってくる。

「何すんだこの！」

俺は顔に押し付けられたアリアの足を両手で押し返す。

「朝ごはん！出し無さいよ！」

「しるか！」

「お腹すくじゃない！」

「すかしとけ、このバカ！」

「バカ——バカですって?! キンジの分際で！」

分際でってなんだ、分際でって。

俺はぶんぶん繰り出されるアリアパンチをかわしながら、回転受身を取ってベットから下りざまに寝室から転がり出た。

なんで起床するだけでこんなダイハードみたいなことせねばならん

のだ。

「お腹減ったお腹減った！へったへったへったへったへったああああああ！！！」

「そんだけ大声出せりや食う必要はねえ！」

「だって今日は優との試合があるのよ！」

「強襲科アサルトの授業は昼からだろ！その前に昼飯食えばいいじゃないか！」

ぎゃあぎゃあいいながら襲い掛かるアリアの手足を避け、止め、受けながしつつ着替えを済ませ

携帯やら拳銃やらを身につけ鞆を掴む。

なんだか強襲科アサルトに居たところの格闘訓練みたいだ。

ぶん！と繰り出されるハイキックを玄関前でしゃがんでかわし、靴は履いて——俺はハタと立ち止まる。

「アリアっ！」

みゃうー！となおもパンチを繰り出そうとするアリアの卵形のおでこを手で押さえ

ぐい、と押し返すと、リーチの差のおかげで無効のパンチはぶんぶん空を切るばかりになる。

だんだんコイツをいなすコツをつかめてきた気がするぞ。

慣れている場合なんかじゃないんだけどなこの状況は。

「な、なによう」

手の届かなくなったことで少しおとなしくなったアリアが上目遣いにその<ruby><rb>赤紫色</rb><rp>(</rp><rt>カメラ</rt><rp></rp><rb>の瞳で恨めしげに俺の顔をにらみつけた。

「登校時間ずらすぞ、お前、先に出ろ」

「なんでよ」

「何でも何もここは男子寮だ俺とお前が並んで出て行ったら面倒なことになるぞ」

「うまい事言って逃げるつもりね!」

何なんだよその屁理屈

「逃げようも俺とお前は同じクラスで席も隣なんだから逃げようが無いだろ!」

言ってて悲しくなってくる、しかしそれが事実なんだがな。

アリアは、むうう…、と頬を水風船みたいにぷくーっと膨らましたチクショウ、可愛いな…

「そ、そんな水風船みたいに膨れても駄目だ! 別々に部屋を出るぞ!」

俺はすかし赤くなった頬を隠すようにドアに向き直る。
しかしうしろからアリアが

「やだ！逃がすもんかキンジはあたしのドレイだ！」

がばっ、と俺の腕を両手で掴んで絶対に逃がさないぞ！の構えを取る。

「は、なせ…この！」

「がうっ！」

がぶ

なんとアリアが犬歯をむいて俺の手に噛み付きやがった。

「いだだだ！」

お前は仔ライオンか！

アリアの口から腕を引き抜きつつ腕時計を確認すると

7時54分

マズイ、7時58分のバスに遅れる。

今日からは絶対にあのバスを逃せないんだ。

なんせ、俺のチャリは木端微塵につぶれちゃったんだからな。

「畜生、この疫病神め…」

俺は仕方なしにへばりついたアリアを引きずりながら部屋を出る。

迷惑な奴！迷惑な奴！迷惑な奴！チクショウ、でも甘酸っぱいクチナシの良い匂いがしやがる！

なんて考えながら。

97・1%

この数字は強襲科^{アサルト}の生存率である。

つまり、100人の内、3人弱はこの学科を生きては卒業できない。訓練中、もしくは任務中に死亡しているのだ、”本当に。”

それが強襲科^{アサルト}であり武偵という仕事の暗部である。

発砲や剣戟の音が鳴り響く強襲科棟^{アサルト}の中を俺はアリアと秋元が戦う予定の決闘場に向かっていたが
常にパーティーを組んで活動する強襲科^{アサルト}の生徒は自然と人懐っこくなるもので

「おうキンジい！お前は絶対帰ってくると信じてたぞ！さあ！ここで1秒でも早く死んでくれ！」

「まだ死んでなかったか夏海、お前こそ俺よりコンマ1秒でも速く死ね。」

「キンジいー！やっと死にに帰ってきたか！お前みたいなマヌケはすぐ死ぬるぞ！武偵ってのはマヌケな奴から死んでくもんだからな！」

「じゃあなんでお前が生き残ってんだよ三上」

郷に入りては郷に従え。

死ぬ死ぬ言うのがここの挨拶なのだが、俺が帰ってきたことを喜んで死ぬ死ぬ言う奴に1人1人に死ぬ死ぬ返していたらそれだけで時間をおもちゃに食ってしまった。

「勘違いするなよお前ら、俺がここに戻ってきたのは一時的な事だ、もうこんな学科ウンザリなんだよ」

俺は火薬くさい奴らをなんとかいなし、アリア達が戦う決闘場に着くと

「遅い！バカキンジ！」

おなじみ赤紫色の瞳をぎぎん！と吊り上げてアリアが門番の様にでてーん！とフィールド入り口に立ちふさがっていた。

「バカってなんだ、バカって、それより秋元はどうした？まだ着てないのか？」

秋元の姿が見あたらない、もうすぐ試合開始の時間なのにその選手が遅れてどうするんだ？

お前が居なきや始まらんぞ、秋元よ

「僕はここにいるよ」

「うおっ！」

声がすると同時に俺の目の前にスタツ、と秋元が下りてきた。何処に居たんだコイツ…？

「さて、遠山君も着たことだし始めようか”アリア”」

一瞬俺を見てニコツ、と笑った秋元はアリアに振り返り。

「そうね、”優”バカキンジもきた事だから始めましょうか」

またバカキンジか、いい加減慣れてきたなその暴言。
しかし、お互い下の名前で呼び合うなんて、親しくなったじゃない

か。

何があったか知らないがいいことだ。

がちゃ、と防弾ガラスでできた扉を開けて、アリアと秋元はフィールド内へと入ってゆきお互いに一礼をして自分の思い思いの場所へと移動し構えを取った。

いよいよ始まるんだな。

実は言うとな俺はこの戦いに非常に興味を持っていた。

なぜならEランク武偵であるはずの秋元は銃弾を弾いたり斬ったりするトンデモない奴で、アリアを戦うとどちらが強いのか非常に興味があったのだ。

「おっす、キンジ！お前も着てたのか！」

俺を呼ぶ声に右を向くとそこには備え付けのベンチに腰掛けた強襲^{アサ}科^{ルト}のBランク武偵、伊達豪^{だてこう}がいた。

俺が強襲科^{アサルト}にいたころよくパーティーを組んで一緒に依頼^{クエスト}行ってたやつで、

いつも眼帯をしている素っ頓狂な奴だが格闘戦、ナイフ、拳銃などなんでもバランスよく扱える奴で、結構頼りになる奴である。

「なんだ、俺以外誰も着てないものだと思ったんだが着てたのか」

俺の言葉通りフィールド周りにはがらん、としている。

そりゃそうだ、本来Sランク武偵とEランク武偵の戦闘なんて子猫とライオンを戦わせるようなもので

結果など火を見るよりも明らかなのだ。

そんな試合を見に来る奴はよっぽどの物好きなんだろう、まあ伊達がそうなんだが。

「おう、いつもだったら来ないんだが、あの転校生には何か感じるものがあってねえ…」

と伊達にはやけながらフィールドの中で構えをとっている秋元を指差した。

コイツは女好きだったな。

しかし残念、秋元は男なんだぜ、知ってるのは俺だけだろうけど。

「感じるものって、お前なあ…女見るといつも言ってるじゃねえか」

俺は呆れながらどかつ、と伊達の横に腰を下ろす

「そら！試合開始や！制限時間は無制限！どちらかが参った言うか死ぬまで続けろ！」

丁度試合開始の時間だったようでフィールドに強襲科担任、アサルト蘭豹の物騒な開始宣言が響き渡る。

「さて、アリアかかっておいで」

ちゃきつ、と秋元はバタフライ・ナイフを開きながらアリアに挑発をする。

いきなり挑発するなんてよっぽど自分の腕に自信があるんだな。

「なめないでよ、Eランクがあたしに勝てると思うてるわけ？！」

がばっ！とアリアはスカートの中のホルスターから黒と銀、それぞれガバメントを取り出し、秋元に向ける。

「たしかに僕はEランクだけど、これは僕の望んだランクじゃなくてね！」

そういうが速いか秋元はナイフを握っている手とは逆の手でグロック17を抜き様に2発放った。

アリアはその弾を体をはためかせて間を縫うようにかわすと、ばん！と小さな獅子のように秋元に向かって飛びかかった。

常に防弾服を着用している武偵同士の戦いでは銃は一撃必殺の武器とはなりえない。

故に、銃を打撃武器として使用する近接戦闘が武偵同士の一般的な戦闘だ。

秋元は飛び掛ってきたアリアの服を掴むと、ぐるん！と柔道で言う巴投げみたいな投げ方でアリアを逆に投げ飛ばした。

しかしそこはアリア、投げられたぐらいでひるむ事はせずに回転受身をとrittつ秋元に向かって4発、銃弾を放ちすぐに体制を立て直す。

しかし秋元は避けようともせずその銃弾をお得意の銃弾斬りで4発すべて叩き斬った。

「お、おいキンジ！あの子いま何したんや？」

伊達が驚きの声を上げて俺に聞いてくる。

当然だ、Eランクの秋元が銃弾を斬ったのだから。

あんな芸当はSランクでもそうそうできる奴はいないんだからな。

「見たとおり、弾を斬ったんだ」

俺はけっして秋元とアリアから目を放さず簡潔に答える。

今はお前の相手なんかしてる場合じゃないんだ。
すまぬ、伊達よ。

秋元は銃弾を斬ったあと流れるような手つきでバタフライ・ナイフをしまうとスカートの中のホルスターからグロック17をもう1丁取り出した。

アリアは一瞬、戸惑いの表情を見せたが引き続きガバメントを秋元に向けて放つ。

その弾を秋元は

ギイン！ギイン！

銃弾で弾いた。

銃弾^{ヒリヤード}弾き

昔、兄さんが得意とした技の1つだ。

文字通り、銃弾を銃弾で弾き、防御する技。

恐らくヒステリアモードの俺でもできる確立は五分五分だろう、そんな芸当を秋元は何食わぬ顔でやってのけた。

「この！」

アリアは銃撃戦では勝ち目は薄いと見たのかガバメントを仕舞うと背中から小太刀を2本取り出し、流星のような猛烈な突きを秋元の両肩目掛けて繰り出した。

秋元はその突きを後方宙返りで避けつつアリアにむかって6発余り銃弾を放った。

アリアはその場で踊るみたいに銃弾を避けていたが

「うぐっ！」

苦痛に顔を歪めた、見ると1発被弾している。

いくら防弾制服とは言え、衝撃までなくす事はできない。

俺も強襲科に居たころイヤというほど経験したからわかる、弾に当たると金属バットで殴られたみたいな衝撃に襲われるんだ。

秋元は一瞬ひるんだ隙を見逃さず、銃を戻すとバタフライ・ナイフを”2本”取り出してアリアに飛び掛った。

「二丁拳銃に続いて、二刀流?! あの子は何者なんや!? キンジ!」

伊達が驚きの声をあげる

こっちが聞きてえよ伊達、俺にもアイツの本当の力は分からない。

二丁拳銃と二刀流を扱うなんて、並みの奴じゃできない。

アリアは飛び掛ってきた秋元が繰り出した斬撃を小太刀で器用に受け止めると、右足で蹴りを秋元の顎目掛けて繰り出した。

しかし秋元はその蹴りをあろうことか同じ足で受け止める。

蹴りを蹴りで止めるやつなんて見た事ねえぞ:

お互いの右足を交わせながら2本の刀をとめあうという奇妙な格好で鏢迫り合いになったアリアと秋元は

「どうしたの? Sランク武偵、神崎・H・アリアの実力はこんなものなのかな?」

「う、うるさいわね! 優! アンタ一体何者なのよ!」

秋元は余裕の表情でなおもアリアを挑発する。

あんなことをやっておきながら息1つ切れていないなんてお前ら化け物だな。

「だけど、そろそろ終わりにさせてもらおうよ!」

秋元はそう言うとその場で、ぐるん! と前に一回転しながら開いて

いる左足をつかってアリアの左肩に踵落としを決め。

その衝撃で小太刀を落としたアリアの左腕を掴むと、ぶん！とアリアを投げ飛ばし受身を取ったアリアの背後に、閃光のような速さで回り込むと首筋に一発、チョップを繰り出した。

「あう…」

その一打が決定打となったのかアリアは手に持っていた小太刀を落とすとその場で、バタっ、と気絶してしまった。

隣で伊達がその大きな口をあんぐりとあけたまま固まっていた。

俺だって驚きだ、あのアリアがほぼ何もできずに負けたのだ。

秋元が強いとわかっていてもここまで圧倒的なものとは思わなかった。

当の秋元だが、あの一戦の後でも余裕の笑顔で

「おーうい！遠山くーん！約束どおり僕もチームに入れてもらおうからねー！」

なんて、手を振りながら俺に向かって言ってきた。

秋元、お前一体何者なんだ？

決闘（後書き）

戦闘描写が苦手でごめんなさい。

誤字指摘、感想はどんどんください

レオポン（前書き）

駄文をどうぞ

レオポン

俺はあの試合の後、気絶したアリアを秋元と一緒に救護科アンビュラスつれて行った。

「力はそんなに入れてないからすぐ目を覚ますと思うよ」

という秋元の言葉通りアリアは救護科アンビュラスの病室のベッドに寝かされて10分も程で目を覚ました。

「あたし…負けたの？」

アリアが今でも信じられないという表情で俺に問いかけてきた。
今まで試合で負けたことなどなかったのだから。

あの試合の後、伊達に聞いて始めた知ったのだがアリアは1年の3学期に転校してきて、強襲科アサルトに入った後の1対1の試合では99戦無敗だったらしい。

「ああ、お前は負けたんだ、俺にも信じられないよ。99戦無敗のお前がEランクの秋元に負けるなんてね」

俺はアリアの問いかけに答えながら病室に備え付けられたパイプ椅子に寄りかかって無防備な寝顔を晒している秋元に視線を向ける。
その無防備の寝顔は男には到底見えず、ただ無邪気な少女のように見えた。

クソッ、男だとわかっていても可愛いと思っちゃまう。

「アリア、体はちゃんと動くか？」

「ん、動くわ、にしても優って何者なのかしら…」

アリアは体の動きを確かめながら俺と同じく秋元に視線を向ける。
いきなりUZIを破壊して、俺の隣の席を陣取って、俺の家に押し
かけてきてアリアのパートナーになれと言ってきた秋元。
本当にコイツは分からない。

「んっ…？アリア、目が覚めたのか？」

俺の達の視線に気がついて目が覚めたのか秋元が若干男口調になり
ながら寄りかかっていたパイプ椅子から立ち上がり。

んっ…！

と大きな伸びを1つするとアリアに向き直り。

「さて、アリア。約束どおり僕もチームに入れてもうよ。」

「仕方ないわね、貴族は約束は守るわ、あんたも今からあたし達の
チームよ。よろしく、優。」

アリアが秋元に握手を求めると秋元も

「こっちこそ」

と、握手を交わした。

ん？ちよっと待て、今貴族って言ったよな？アリアって貴族なのか
…？

今度、理子にでも依頼して調べてもらおう、アイツはオタクでネッ
ト中毒だが盗聴盗撮、ハッキングと言った武偵向きの趣味を持って
いるので情報収集能力は凄いんだ。

そのおかげで武偵ランクはAなんだとか。

「よし、アリアも目を覚ました事だし俺はゲーセンによって少し時間つぶしてから家に帰る。」

俺は椅子から立ち上がり病室を出て行こうとしたが後ろからアリアが

「ねえ、ゲーセンって何？キンジ。」

なんて問いかけてきたもんだから。

「ゲームセンターの略だ、お前そんな事も知らないのか」

俺は半ば呆れながらアリアの質問に答える。

「帰国子女なんだから仕方ないでしょ。うん、あたしも一緒に行くわ、キンジが強襲科アサルトに戻ってきたご褒美よ。」

「はあ？そんなのご褒美じゃなくて罰ゲームだろ」

ご褒美ってなんだ、お前が一緒に来るとかも罰ゲームじゃないか。お前と一緒にいくと事ある事に拳銃ぶっ放しそうだからな。

「罰ゲームですって…？もう一回入ったら風穴」

ちゃきつ、つとガバメントを構える音が後ろから聞こえたので自らの身の危険を感じた俺は

「わかった、わかったご褒美をありがとう、アリア」

両手を上に上げる降参のポーズでアリアを制止する。

しかし、アリアだけでは不安だ、さっきも言ったとおり事ある事に拳銃をぶっ放されていたらたまったもんじゃない。

誰か、アリアを抑制できる奴を…

考えている俺の視界の片隅にニコニコと俺達を見ながら微笑んでいる秋元が写った。

そうか、秋元ならアリアを抑制できる！

「秋元、お前もこい！ どうせ暇なんだろう？」

俺が秋元を誘うと秋元はちょっと驚いたような顔をしたがすぐに笑顔に戻ると

「勿論！ 僕も一緒にさせてもらうよ」

と快く俺の誘いを承諾してくれた。

「アリア、秋元も一緒に行くけどいいよな？」

と、一応承諾を取るためにアリアに問う。

「いいわよ」

アリアの承諾も取れたことだし行くとするか。

俺達は病室を出てフロントのカウンターに退出届け出をだすと横一列に並んでゲーセンに向かった。

「ねえキンジ、なにこれ？」

俺がコイン式のシューティングゲームで遊んでいるとアリアがクレインゲームを指差しながら俺に尋ねてくる。
こいつクレインゲームも知らないのか。

「アリア。そいつはUFOキャッチャーだ、金を入れてその手元のボタンでそのクレーンを操作するんだ」

あ、しまった。

俺はアリアの質問に答えているとゲームの中の敵が俺の頭を撃ち抜いてきた。

くそ、やっちゃったな。

俺は画面に映るGAME OVERの文字を恨めしげに見つめた後、アリアの方へ振り返ると

「……………あーーーーー」

べたっ、とカエルみたいにガラスに張り付いていた。

背の低さとヌイグルミの背景が相まって、まるで小学生みたいに見える。

「どうした？そんなに珍しいか？」

俺が問いかけてもアリアから返事はない。

よっぽど珍しくみえるのか？

俺が横からアリアの顔を覗き込むと

口を逆三角形にしてヨダレをたらしていた。

おいおい、鬼神の強さを誇るSランク武偵、神崎・H・アリア様の見せる顔じゃないだろ。

しかし、ヨダレをたらすほど珍しいのか？

「かわいいー」

違った、ただアリアは中のヌイグルミに見とれていただけだった。ケースの中にはライオンだかトラだか分からない生物が山積みになっている、見たところたしかにカワイイ。

「なんだ、やりたいのか？」

俺がアリアに聞くと、アリアはギギギ、と機械みたいな動作で俺の方に振り向くと。

高速で顔を上下させてきた。

どうやらよっぽどやりたいらしい。

「やり方教えてやろうか」

アリア無言でまた高速で顔を上下させた。

俺が横のボタンを押したあと縦のボタンを押せと教えてやるとアリアはバツ、と目にも留まらぬ速さで財布から

100円玉を取り出すと

ビシッ、と狙撃訓練の際のような正しい姿勢になってクレーンゲームと向き合った。

「へえー、クレーンゲームか、懐かしいなー」

「うおっ！」

俺の横から秋元がにゅっと顔を出してきた。いつもどっから出てくるんだコイツは。

「懐かしいって、お前何歳だよ…」

「16歳だよ」

とアリアの操作を見ながら答えた。

ふざけて聞いたつもりなのに真面目に答えやがった。
なんだか合わせづらい奴だな。

ぼとっ、アリアが操作するクレーンから謎の生物が落ちた。

「っーーーーーっ！」

アリアは真っ赤になってスカートの中に手を突っ込んでガバメントを引き抜こうとした。

ちょ、アリア！お前武偵だろ！こんなところで発砲でもしたら大変な騒ぎになるぞ。

俺がアリアを制止しようとする秋元が先に動いて

アリアの手を手で押さえ耳元で何かをささやくとアリアは拳銃を抜こうとするのをやめておとなしくなった。

前にも部屋でこんな事があったな。

秋元が耳元で何かささやくと決まってアリアはおとなしくなる。

「しかたねえな、俺が代わりにとってやるよ、かわれ。」

しかしこの調子ではいつか本当に拳銃をぶっ放しかねないので心配になった俺は財布を取り出した。

プライドの高いアリアは意地でもボタンから離れようとしなかったが強引に押しのける。

無理に続けられてキレられたらこっちも困るからな。

ふむ…

穴の近くにある奴が狙い目だな：

俺は一件取りにくそうな場所にある謎のネコ科動物に狙いを定める。
ケースの中のヌイグルミはどれも同じなのでどれをとっても文句は
言わないはずだ。
ぎゅっ。

見事クレーンは一匹のネコ科生物を掴む事に成功する。

「っ」

ごくり、とアリアが喉を鳴らす音が聞こえる、秋元もヌイグルミを
じーっと見つめている。

「お」

掴みあげたヌイグルミのタグに絡まるようにもう1つヌイグルミが
くっついている。

「見て！キンジ！2匹つれてる！」

言われなくても見えてるさ、おれがやってんだから。

「キンジ！放したら承知しないわよ！」

これだけは俺がどうこうできる問題じゃない。

「あ…入る！入る！行けーっ！」

アリアほどじゃないが俺もちょっとこれは興奮する。

それは秋元も同じようでヌイグルミの行き先をじーっと見つめてい
る。

一匹は確實だがもう一匹はどうだ…？

クレーンが…

開く！

ぼとっ、1匹目が穴に落ちそり引っ張られる形で2匹目も穴の中へと落ちてゆく！

「入った！キンジのくせにやるわね！」

「おおー！遠山君うまいねー」

アリアと秋元から同時に賞賛の声上がる。
これは結構嬉しくて

「ふふ、昔クレーンの遠山といわれてた事があるんだ」

なんて、冗談を言ってしまった。
がばっ

アリアは取り出し口に飛び込みかねない勢いで両手を突っ込むと、
中からヌイグルミを取り出した。

ちよっと見るとタグには『レオポン』と書いてある。
なんじゃそりゃ。

「かぁーわぁーいいー！！！」

アリアはレオポンとか言う謎のネコ科動物を潰しかねない勢いで抱きしめる。

おいおい、折角とったんだから潰さないでくれよ…

…その姿があまりにも『普通』の女の子で…

俺はちよっと、不思議な感じがした。

「キンジ」

ふと見るとアリアが俺に2匹の内1匹を俺にぐい、と差し出してきた。

「あげる、アンタの手柄だからご褒美よ」

ツリ目気味の目を細めたアリアに俺はちょっと驚く。

コイツこんな表情もできるのか。

チクシヨウ。

カワイイ。

「俺はいらねえよ、秋元にやったらどうだ？」

俺は照れ隠しに頬の辺りをポリポリとかきながらアリアに言った。

「そう…じゃあ優あげるわ」

少しアリアは残念そうな顔をして秋元にぐい、とヌイグルミを半ば押し付けるような形で渡した。

しかし秋元は

「いやー、そういうの僕の趣味じゃないんだ。やっぱり遠山君にあげなよ」

と言って受け取らず俺に振ってきた。

「やっぱりキンジあげる、というかこれは命令よ！受け取りなさい！」

ぐい！と先ほどよりも強い力でヌイグルミを差し出してきた。

「お、おう」

と俺はレオポン1匹を受け取りやっとそれが携帯のストラップになっている事に気がつく。

そういえば俺は携帯にストラップなんてつけたこと無かったな。つけてみるか。

俺はポケットから携帯を取り出して、ストラップのヒモを穴にねじ込む。

それを見るとアリアは同じくパールピンクの携帯を取り出して見よう見まねでレオポンをつけ始めた。

たまたま、アリアの携帯にもストラップがなかったらしい。

レオポンの尻からでているストラップは中途半端に太くなかなか入らない。

ていうかなんで尻なんかヒモをつけたんだこのヌイグルミの設計者は。

「先につけたほうが勝ちよ、キンジ」

「なんだそりゃ、お前はガキか」

「ん…、やったわ入りそう」

「こっちも…入るぞ、お前なんか負けねー」

そういえば女子からプレゼントをもらったのは初めてののような気がする。

白雪から大なり小なりもらったりしているが幼馴染だからあれはノカンだろう。

うんうんうなりながら俺達はその場でレオポンくっつけ合戦を繰り返す。

広げるのであった。

秋元はそんな俺達をにこにこ微笑みながら眺めている。
おっ、やった入ったぞ！

我ながらスケール小さいな。

余談だが、武偵高の近くにあるゲーセンはシューティング系ゲームの数が日本一らしい。

理由はいわなくてもわかるよな？

レオポン（後書き）

レオポンってどんな生物なんだろう？

誤字指摘、感想はどんどんください

双銃双剣《カドラ》のアリア、無の秋元（前書き）

駄文でごめんなさい

双銃双剣《カドラ》のエリア、無の秋元

あのレオポン合戦の翌日。

「理子」

メールで呼び出していた通り、理子は女子寮の前の温室にいた。温室とはつまりでかいビニールハウスで、いつも人気が無く秘密の打ち合わせにはもってこいの場所である。

「キーくうーん！」

バラ園の中で理子が緩いウェーブのかかった髪を振りながら振り返った。

コイツはエリアと同じで、チビだが所謂、美少女の部類に入る。

大きな二重の目はパツチリ、緩いウェーブのかかった髪はツーサイドアップ、背中にたらしめた長い髪に

ツインテールを増設した、欲張りな髪型である。

「相変わらずの改造制服だな、なんだよその白いフワフワは」

「これは武偵制服白ロリアレンジだよ。キー君いい加減ロリータの種類ぐらい覚えようよ。」

「キツパリと断る。お前は一体何着制服を持ってるんだ。」

えっと、と言いながら指折りしながら制服の数を数え始める。

指折りせねばならんほど持っているのか…

武偵高の制服は防弾性であるがゆえに、一般の高校の制服と比べて

値段が張る。

それを指折りするほど持つてゐるんだから金銭的には余裕があるんだろうな。

「こつち向け理子、いいか？この事はアリアには内緒だぞ。」

下を向いていた理子をこちらに向けさせると俺はカバンの中から紙袋で嚴重に隠したゲームの箱を取り出した。

「らじゃーっ！」

ビシっ、と理子はキョウツケの姿勢になり、両手で敬礼のポーズみたいなのを作った。

なんだその敬礼は。

苦い顔で俺が紙袋を差し出すと理子は電光石火の勢いで俺の手から紙袋をもぎ取ると

びりびりと袋を破いていった。

鼻息がふんふん荒くてまるで野獣みたいだな。

「うわぁーっ！『しろくろっ！』と『白詰草物語』、それに『妹ゴス』だよぉーっ！」

理子が両手に持ってぶんぶん振り回しているのはR-15指定、つまり15歳以上でないと買えないいわゆるギャルゲーである。

——この前も言ったとおり、理子はオタクである。

しかし、世間一般のオタク女子と違うのは、コイツは女のクセにギャルゲーマニアという奇抜な趣味を持っているのである。

特に、自分と同じくフワフワでヒラヒラの服を着ているヒロインが出てくる作品に関して、異常な関心を示す。

もちろん理子も15歳以上なのでこれらのゲームが買える筈だが

先日ゲーム屋もかねている学園島とビデオ屋でゲームを売ってもらえなかったとグチっていた。

アルバイトのお姉さんが理子の身長を見て中学生と判断したらしい。そこで俺が替わりに、死ぬほど恥ずかしい思いをしながら買ってきてやったという訳である。

たぶん、あのアルバイトの人に勘違いされているんだなあ：しかしこれもアリアと秋元のことを知るためだ。

——先日、アリアが自分のことを貴族と言っていたこと。突然転校していろいろと俺にやらかしてくれた秋元。あいつらを追い払うべきためにはまずその謎を解き明かさなければならぬ。

んでもって、アイツら本人が教えてくれないのならばこっちはこっちでアイツらの事を

多角的に調べて、推理するしかない。

武偵同士の戦いはまず情報戦からだと言場では決まっているからな。

「あゝ、これとこれはいらない。理子、こういうのうキライなの」

あれ？全て理子好みのパッケージだったはずだが？何か別のものでも混じっていたのか？

ぶっすうー、とその美少女顔を台無しにするような膨れっ顔で俺に返してきたのは

『妹^{マイ}ゴス』の続編、2と3だ。

「なんでだ？これ他のと同じような奴だろ」

「ちがう。『2』とか『3』なんて蔑称。個々の作品に対する侮辱。嫌なよび方。

なんだか訳が分からんが、どうやらこれらの2つは理子の好みでは

ないらしい。

「…まあ…、その続編以外の作品は全部くれてやる。その代わり、昨日言ったとおりアリアと秋元について教えろ。」

「——あい！」

理子はまごうことなきバカである、しかし先日も言ったとおり、情報収集能力が桁外れである。

「んじゃ、速くしろ。俺はトイレに行くフリをしてその小窓からワイヤーを使って脱出してきたんだ。アリアにばれて補足されるのも時間の問題だ。」

俺は周囲を見回して、丁度足のつく高さにあった柵に腰を下ろす。理子はゲームをなんでか服の中にしまいつつぴょん、っとちよっとジャンプしながら俺の隣に座ってきた。向こうは足がつかないらしく膝下がぷらーん、ぷらーんと遊んでいる。

「ねーねえ、キー君はアリア達に尻にしかれてるの？ カノジョなんだからプロフィールぐらい自分で聞けばいいのに。」

「カノジョじゃねえよ、しかもそんな言い方じゃ俺が2人もカノジョ持ってるって事になっちまうだろ。」

「えー、キンジはアリアとユーちゃん、両方とできてるって噂だよ。」

おいおい、勘弁してくれよ。

なんで意味の分からん噂が立ってるんだ。

アリアは凶暴だし秋元は男だぞ：

そんな奴らをカノジヨにするくらいなら拳銃で頭打ち抜いて自決するさ。

「昨日の朝、アリアと腕組んで寮からでてきたってアリアフアンクラブの人たちが怒ってたよ。それにその日の夕方、ユーちゃんと並んで仲良く歩いてたっていうのも目撃されているよ。」

最悪だ、あの朝はアリアに腕にしがみつかれて放せなかったから引きずっていただけだし、秋元とはアリアと一緒に救護科アンビュラスに連れて行っただけなのに：

「ねえんえ、どこまでしたの？」

「何をだ」

「えっちいこと」

「するかっ！」

「嘘付けーえ！健全な高校生男子の癖に！」

満面の笑みでおれのわき腹をひじでつついてくる。

「そんな事より本題だ。まずはアリアの情報を教えろ」

俺が話を本題に戻すと理子は、ちえー、と少しつまらなそうな顔をしてから。

「まずねアリアの武偵ランクだけど…」

「それは知ってる」

「ありゃ、そうだったの」

「それでその次は、アリアはちっこいのに徒手格闘もうまいんだよ。」

俺はべつにあまり驚かなかった。

体育倉庫で投げられたときヒステリアモードだったのに受身を取るのが精一杯だった。

「で、その流派はボクシングから関節技、なんでもありのえつとバリ…バリツウ…」

「バーリトワードか」

「そうそうそれぞれ、それが使えるの。イギリスでは縮めてバリツって呼ぶんだって。」

拳銃とナイフはもう天才の領域、どっちも二刀流なんだよ。」

「それ知ってる。」

「えー、理子が折角調べてきたのにキー君いっぱいしてるんじゃない！じゃあ、二つ名は知ってる？」

二つ名、成績の良い武偵には自然と二つ名がつくものである。
アリアは若干16歳にしてもうすでに二つ名を持っているのか。

「それは知らない、なんだよその二つ名はってのは」

「双銃双剣のアリア」
カドラ

「双銃双剣」
カドラ

武偵用語では二丁拳銃ないし二刀流の事はダブル、と呼ぶ。

これは英語のダブルからきていうのだがそれから推測するにおそらく4つの武器を持つと言う意味の二つ名なのだろう。
カトロ

「笑っちゃうよね、双銃双剣だってさ」
カドラ

「笑いどころがよく分からないんだが、情報はそれだけか？」

「ううん。後ねキー君が思ったとおり、やっぱりアリアは貴族だったよ。」

やっぱり貴族だったか。

あの時アリアが口にした貴族は約束は破らないという言葉通りアリアは貴族だった。

「イギリスの方の本家がミドルネーム『H』家ですごくゆうめいな一族らしいよ。おばあちゃんはDameデームの称号も持ってるんだって。」

Dameデームイギリス王家から与えられる称号だ。

そんなトンデモない物を持つてるなんて相当凄い貴族様なんだろうな。

「でもねー、アリアはその『H』家の人とうまくいってないらしいよ。それでフルネームをあんまり名乗りたがらないんだあー。理子

は知ってるけどねー」

「教えろ、ゲームやったろ」

「理子は親の七光りとか大っ嫌いなんだよね。有名な一族だからイギリスのサイトでもググれば見つかるんじゃない？」

「俺、英語駄目なんだよ。」

「まあ、がんばれや！」

俺の背中をたたこうとしたらしい理子の手がぶんっ！

思いつきり空振ってばしっ！

と俺の腕についていた腕時計をぶったいた。その衝撃で腕時計はがしゃ、と地面に落ちた。

：拾い上げると金属バンドの部分が3本折れてしまっている。

「うぁーっ！ごつめーん！」

「別に安物だから構わん、台場で1980円で買った安物だ」

「だめ！理子に修理させて！いっぱい修理させて！依頼人クライアントの持ち物の壊したなんて理子の信用にかかわるから！」

俺の腕から時計をむしりとると制服の襟をぐいっと引っ張ってそれを胸の谷間に入れる。

おい、今でかかったな…

「キンジ？他には？」

「あ、ああ、アリアに関してはそれぐらいいい。次は秋元に関して教えてくれ」

俺は胸を見ていた事を悟られないように冷静(?)に返した。

「えっとね、秋元優、強襲科所属Eランク武偵。^{アサルト}」

「それはどうでもいい、他には？」

「何も無かった。」

は？何も無かった？

あの理子でさえ調べ上げなかったのか？

「何も無かったってなんだよ」

「だから、いくら調べても今年の4月より前の記録なんてなかったの。」

理子は両手にあげてお手上げーのポーズをとる。

なかったって、どういう事だ？秋元には何の記録も無い？

一体全体、何者なんだアイツは。

「わかった。何も無かったならそれでいい、じゃあ俺はそろそろヤバイから帰る。」

「はーあい！キー君またね！」

ぶんぶんと手を振る理子を背に俺は寮へと走り出した。

うちの仔ライオンが恐らく補足しただろうから急いで帰らねば身の危険が…

しかし、秋元に情報が無いなんて今ままで以上に訳が分からん
本当にアイツは何者なんだ。

双銃双剣《カドラ》の Aria、無の秋元（後書き）

誤字指摘、感想はどんどんください。

報告※本編ではありません。(前書き)

この報告は友人のPCを借りて書いたものです。

報告※本編ではありません。

先日、俺のmyPCが逝きました。

となると、当然更新はできなくなるわけでは…

楽しみにしてる方々には（いれば）申し訳ないんですが、しばらく更新ができません。

修理にだそうにもかなり古いPCなので買いなおしたほうが安く済むとのこと。

しかし当方は受験生であるために、勿論というか買いなおそうにも親の許可が下りませんでした。

本当に申し訳ないのですが、更新はここで停止します。

受験が終わり次第、PCを買いなおし。

更新を再開したいと思うのでそれまでまっけていてください。

本当に申し訳ありません。

では、またいつかノシ

報告※本編ではありません。（後書き）

ちよくちよくノートなどに書いて友人のPCを借りて投稿するかも知れないです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8844v/>

緋弾のアリア～ロスト・ネーム～

2011年8月25日18時51分発行